

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 98 Aug. 2018

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

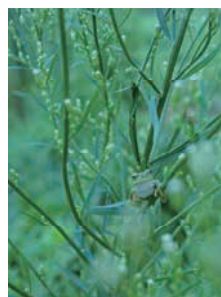
no. 98 Aug.

特集

こみち

CONTENTS

特集	とみち	06
せいげつゐん	棲月院の前のこみち	08
やつおもて	八面神社わきのこみち	10
	高尾神社横のこみち	12
	弁天坂近くのこみち	14
	赤坂のこみち	16
連載		
水路を歩く		20
第2回 根ざす水		
連載 最終回		23
木に学ぶ春夏秋冬		
	大幡の恩賜林に足を踏み入れる	26
	都留の風景写真集－初夏の候－	28
しんぶくじ	真福寺の大カヤ	30
	てくてく都留さんぽ	32
No.6 滝で涼みに上夏狩へ		
	作るってたのしい	34
連載		
さんちょうを見つめる 前編		36
	「いつか」をめざして	38
	Field・Note News	41
	フィールド暦	42
	はじめの一步～新たな出会い新たな発見～	44
	センサーカメラが写した動物たち	48



夕立ちのあとに出会ったアマガエル。「私を見て」と言わんばかりの堂々としたすがたをしています(都留市十日市場:2018年8月1日)



なつがり
夏狩地区で撮影しました。水音に耳を澄ませてみたり、手をひたしてみたり。見ているだけでも涼しくなります(2018年7月1日)

FIELD·NOTE

no.98 Aug.

Field・Map



山 梨 県 都 留 市
面 積 161.63km²
総人口 30,679 人
(2018 年 7 月現在)



今号の こみち



① 榎月院の前のこみち
場所：都留市十日市場
ページ：8~9



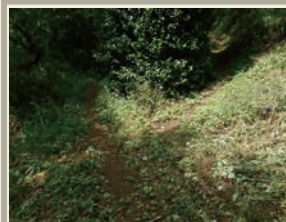
② やつおもて
八面神社わきのこみち
場所：都留市夏狩
ページ：10~11



③ 高尾神社横のこみち
場所：都留市中央
ページ：12~13



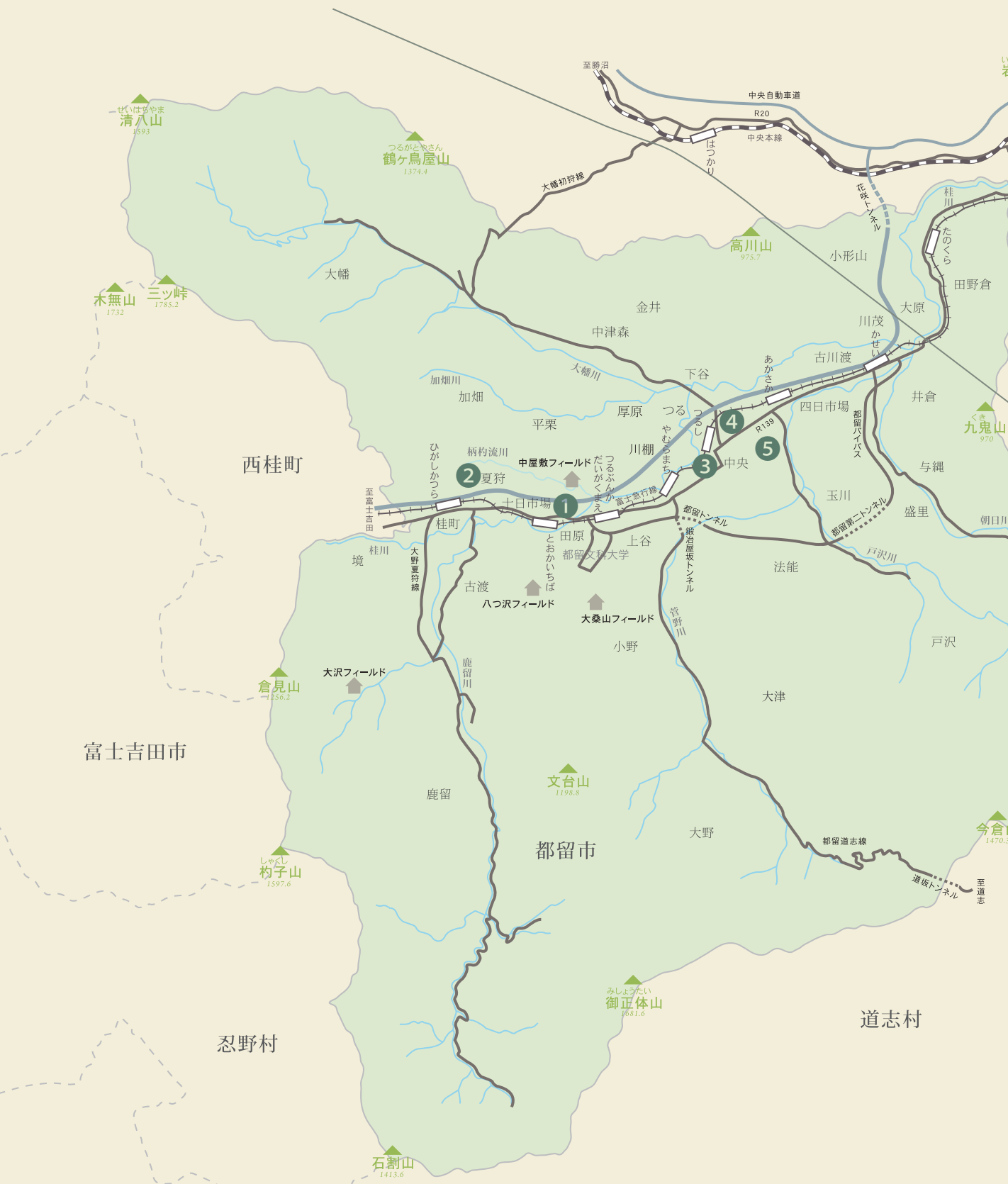
④ 弁天坂近くのこみち
場所：都留市つる
ページ：14~15



⑤ 赤坂のこみち
場所：都留市四日市場から下谷
ページ：16~17



0 1 km 2 km 3 km 4 km 5 km



こみち

車が通りにくいほどのせまい道。

縮尺の大きな地図だと、ひょっとしたら載らないような道。

そんな道に出会くと、入っていいのかという不安と

どこに出るのだろうという期待が生まれます。

私たちはそれをこみちと呼ぶことにしました。

都留のまちを歩いてみると、たくさんのこみちがあることに気がつきます。

私たちは気になったこみちを歩いてみました。

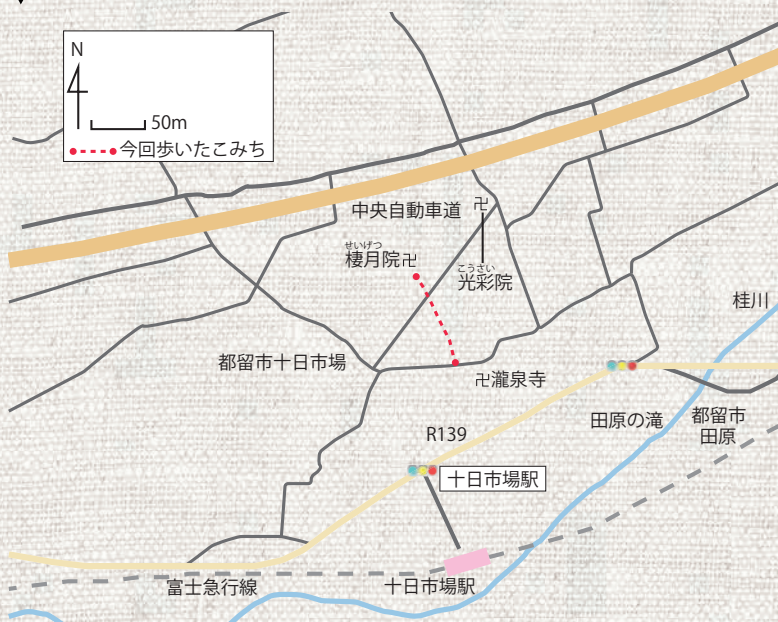


01 せいげついん 棲月院の前のこみち

MEMO

場所：都留市十日市場 とおかいちば
 幅：約2メートル
 距離：約70メートル
 水路の有無：東西方向に1本
 舗装：あり
 車の通行：できる
 最初に歩いた日：2018年6月17日

周辺地図



こみちの入口(2018年6月26日)

このこみちを見つけたとき、覗いても出口が見えなかった。どこに続いているのだろうか。とワクワクしながら民家のあいだを歩いていく。道は舗装されているものの、でこぼこしている。中間地点には小さな橋があり、民家のあいだを縫うように水路があった。ここに来てやっと出口が見えた。この道は棲月院に続いている。午前9時ごろは人通りがなく、サラサラと水の流れる音だけが響く。出口までゆっくり歩いて2分だった。来た道を振り返ってみる。かつてどのように道が使われていたのか、その名残を見つけることはできなかった。近くに住むかたの記憶には残っているのだろうか。そのまま棲月院へと向かった。

住職の白井弘成さん(79)にお話をうかがうと、こみちが舗装されたのは今から約50年前だそう。まわりはすべて田んぼで道幅は4尺(1尺およそ30センチ)、広いところで6尺だったという。人が一人通れるほどの道幅だが、まわりが開けていて見晴らしのいい道だったのかもしれない。変わったのは道の幅だけではなかった。昔は直角の狭いカーブが二つあったそうだ。では、なぜそのような道が作られたのだろう。



①



②



③

①棲月院へと続くこみち。コンクリートのヒビが50年の歳月を教えてくれる ②臼井さんが当時の曲がり角があったこみちの図を描いてくれた ③こみちの中間にある水路。オムツ専用の洗い場だったそう(2018年6月17日)

曲がり角のヒミツ

臼井さんのお話は江戸時代末期にまでさかのぼる。当時、都留市内の寺では庶民が賭博をして楽しんでいたという。賭博とは金銭や品物を賭けて勝負をすることで、寺社奉行の取り締まりの対象だった。その寺社奉行から見つかったとき、逃げ隠れして時間を稼ぐために道を直角に曲げたのだという。

時代が変わり、寺で賭博はなくなっていた。田んぼが民家に建て替えられるようになると、私たちが歩いたこみちは不便だということでも舗装された。臼井さんが自治会の中心となり、まっすぐな道にしたそう。

テンポよく話してくださる臼井さんのおかげで、50年前のこともあっさりと耳に入ってきた。スラスラと話せるほどこの道に慣れ親しみ、思い出があったのかもしれない。以前のこみちはなくなってしまったけれど、楽しそうに懐かしんでいるようにも見えた。名前がなく地図にも載っていない昔のこみちは、十日市場の人々の記憶にしっかりと残っているのだろう。

やっおもて 02 八面神社わきのこみち

周辺地図



MEMO

場所：都留市夏狩^{なつがり}
 道幅：約2メートル
 距離：約182メートル
 水路の有無：道なりに1本、地図上に示したもの1本
 舗装：あり
 車の通行：できない
 最初に歩いた日：2018年7月1日



こみちの入口(2018年7月9日)

中央自動車道の下を抜けた先は、車が通れる道幅だった。体に負担がかからないほどの緩やかな下り坂だ。右手には駐車場があり、そこには「この先、車の通り抜けできません。」と赤い文字で書かれた看板がある。文字の色がかすれていたので古いものだろう。

そのまま進んでいくと、両側に田んぼが広がる。その先には民家が4〜5軒建ち並んでいた。民家を越えると右手に畑がある。畑のそばにまた看板を発見した。「この先車両の通り抜けはできません。」と書かれている。最初の看板と内容が同じだ。一つ目の看板より新しい。「一つじゃ足りなかったのか」と思いながら通り過ぎた。

畑の斜め向かいには八面神社^{やっおもて}がある。このあたりから今までの3分の2ほどの道幅になった。私たちのイメージしていた通りのこみちだ。看板は道幅が狭くなるから車が通れないということを知らせていたのだろう。また道の傾斜も激しくなり、少し体を後ろに倒しながら進む。右手を見ると黄色い立て看板が目飛び込んできた。ボコボコの看板に「自動車は通り抜けできません」とある。三つのなかで一番古いようだ。一つ目の看板から約120



①



②



③

①八面神社わきの道幅が狭くなる地点 ②左から見つけた順に並んでいる。真ん中以外は歩いていて視界に入る程度。真ん中は目線を上げたら見える高さにある ③人の生活が感じられるこみち (2018 年 7 月 9 日)

メートルのあいだで、同じ内容の看板が三つもあった。看板を通過すると、それまでも小さく聞こえていたザーツという音が迫力を増す。こみちの下を水路が横断していた。

家との距離が近くなる

水路の先はまた民家が並ぶ。道幅が狭くなり歩行者と家との距離が近いせいか、家にお邪魔しているような気分になった。再び道に視線を戻すと道の端にコンクリートが盛り固められていた。民家の前にはガードレールがないため、平らなままだとストッパーの役割を果たすものがないからだろうか。民家が建ち並ぶこみちを抜けると、^{じゅうにてん}十二天神社のある通りに出た。

同じ内容の看板がいくつも立っているのはなぜだろう。正しい答えはわからない。看板のおかげで車が通らない道は、答えを考える余裕も生まれる。どうしてだろうと考えながら歩く道のりはとても楽しかった。

杉浦茜(国文学科3年)Ⅱ文・写真
平岡摩梨菜(社会学科3年)Ⅱ文・写真

03 高尾神社横のこみち

MEMO

場所：都留市中央
道幅：約 2 メートル
距離：約 320 メートル
水路の有無：北東方向に 1 本
(がちゅう
家申川)
舗装：あり(ブロックタイル)
車の通行：できない(通行禁止)
最初に歩いた日：2018 年 6 月 25 日

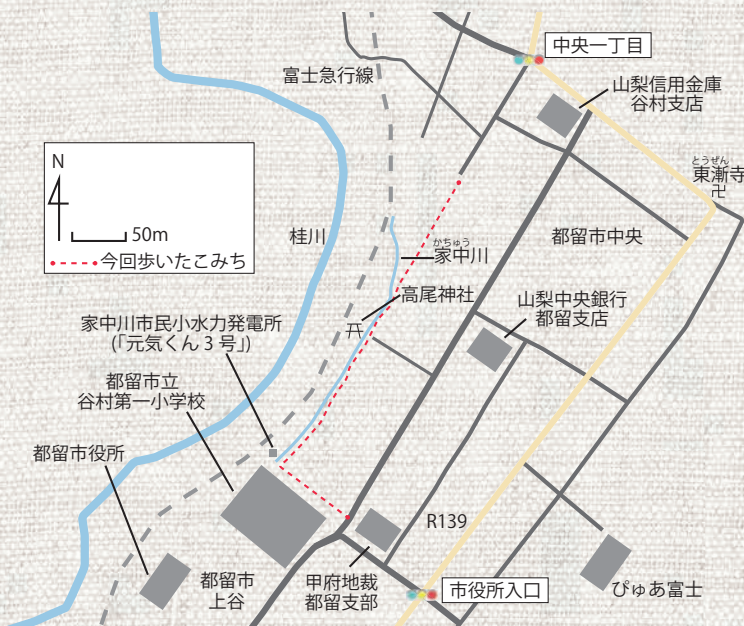


こみちの入口(2018年7月6日)

6月25日。都留市上谷にある市立谷村第一小学校から、三町商店街の道へ320メートルほど続くこみちを歩いた。道幅は2メートルほどで車は通行禁止だ。歩いたこみちはブルックタイルで舗装されている。谷村第一小学校を背にして道を眺めると、右手には家が建ち並び、左手には家中川が流れる。川を挟んだ反対側にも民家が建ち並ぶ。こみち沿いにある民家は15軒ほど。谷村第一小学校から100メートルほど進むと左手に高尾神社がある。高尾神社の木と植え込みのアジサイが家中川の上にせり出し、水音と緑が涼しげな空間をつくりだす。

家中川は水路として見えている部分だけか
 と思つていた。しかし左手側から水路を覗く
 と、ブロックタイルで舗装されている地面の
 下にも水が流れていることがわかった。家中
 川の水量は多く、水音も大きい。ザーという
 水音が絶え間なく聞こえてくる。となりにい
 る人とも少し声を張らないと会話ができない
 くらいだ。午後3時過ぎに歩くと、ちょうど
 小学生の下校時間だった。家中川の水の流れ
 る音とともに小学生の音が賑やかに響いてい
 る。ほかにも犬の散歩をしている人、自転車

 周边地图





①水路横を流れる家中川。植え込みのアジサイが川に
せり出す ②車が来ないので、道の真ん中でも気兼ね
なく世間話ができるそう ③水路にかかる橋を渡って
高尾神社へ。境内は広く、遊具も設置されている
(①、③は2018年7月7日、②は2018年6月25日)

安心して通れるこみち

に乗った高校生などが見られた。このこみちは、市民のかたに多く利用されているようだ。

この日は谷村第一小学校の近くに住む70代の女性にお話を聞くことができた。谷村第一小学校沿いの道(地図上の赤点線、「元気くん3号」があるところまでのまっすぐな道)は昭和50年ごろに舗装され、それまでは土の道だったそうだ。舗装される前の道には幅30センチほどの水路があり、セリなどの植物が生えていたという。そこではよく雑巾を洗うなど、日常的に利用していたそう。舗装工事のさいに、業者の人に当時流行っていた湯もりうどんを出したという。

こみちの利用について聞くと、三町商店街へのお買い物やお散歩のときに使うそうだ。そのほか、小学生が通学路として使っていることや近くに住んでいる人との世間話にも使うという。「車が通らないから安気(あんき)でよいね」とおっしゃっていた。

このこみちの落ち着いた雰囲気が好きだ。この道の水音と緑、安心感、利用する人たちがそんな雰囲気をつくっているのだろう。

小俣溪和(大学院文学研究科1年) 文

小泉篤広(社会学科3年) 写真

04 弁天坂近くのこみち

MEMO

場所：都留市つる
道幅：約2メートル
距離：約45メートル
水路の有無：こみちの入り口に
1本（家中川）
舗装：あり
車の通行：軽自動車ならできる
最初に歩いた日：2018年6月19日



こみちの入口(2018年6月19日)

日差しが強い日の夕方、日陰を求めるようにして歩く。目に留まったのは、古い民家に挟まれて入口がすこし薄暗い道だ。入口から2、3歩進んで立ち止まると、屋根と屋根のあいだから漏れる日差しや通り抜ける心地よい風を感じた。民家を通り過ぎると視界がひらけて明るい道になる。90歩ほど歩いた先の民家で行き止まりだった。交通量の多い道路の近くにあるとは思えないほど、のどかで静かな時間が流れるこみちだ。

こみちの先にある生活

こみち沿いに住む奥秋隆夫さん(65)にお話をうかがうことができた。この道は奥秋さんを含む近所のかたと、お金を出しあつてつくられたそう。「入口の近くは武藤さん、うちの前はうち、奥のほうは井上さん。それぞれでお金を出しあつた。道があれば土地が高く売れるって見通しがあつた」と話してくださった。さらに「昔は農道で、この道幅の半分だったんだよ。馬が1頭通れるくらいの」とおっしゃる。こみちを進んだ左奥に馬小屋があつたそう。私たちが歩いたこみちを、かつては農家のかたが行き来したり馬を連れて



①こみちの奥から見た入口のようす。先だけ少し曲がっている。左手に見える自動車がギリギリ通れる幅しかない ②こみちを進む奥秋さん。入口から行き止まりまで細かく説明してくださった ③消火栓。民家と民家のあいだにある(2018年7月2日)

歩いたりしたのでどうか。

こみちを奥に進むと消火栓がある。年季が入っていてずっと前からそこにあったことが分かる。「この消火栓も、道が細くて消防車が入れないからまわりと協力してつくったんだよ」と奥秋さんはおっしゃる。道幅を広げることや消火栓をつくることなど、ご近所さん同士でたくさんの方を交わさないとできないことだ。こみち沿いに住む人たちは狭い農道を、自分たちで住みやすいようにつくり変えた。

「入口にある家は取り壊すかもしれない」と奥秋さんはおっしゃる。そうしたら道幅が広がって、こみちと呼ぶほど狭い道ではなくなるかもしれない。あたりまえのようにあるこみちも、まわりの風景も、時間とともに移り変わる。

私たちの歩いたこみちは、そのこみち沿いに住む人のお宅にしか繋がっていない。限られた人しか使わない私道は、知る人ぞ知る秘密の道という雰囲気だった。

宇佐美温加(社会学科2年) 文・写真
佐藤琢磨(社会学科3年) 文・写真

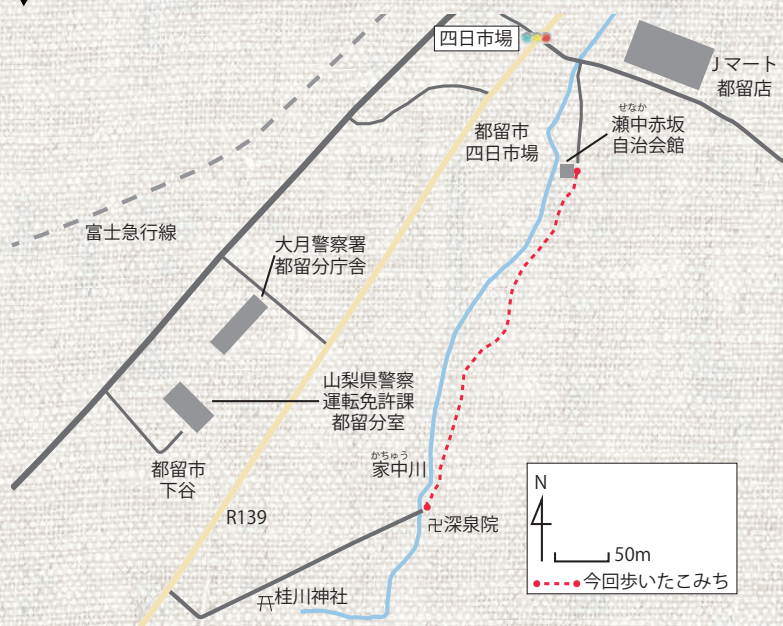
05 赤坂のこみち

MEMO

場所：都留市^{よっかいちば}四日市場^{しもや}から下谷
道幅：約 50 センチメートル
距離：約 243 メートル
水路の有無：北東方向に一本
(^{かちゅう}家中川)

舗装：なし
車の通行：できない
最初に歩いた日：2018 年 6 月 15 日

周辺地図



こみちの入り口(2018年6月15日)

「この道、入ってもいいのかな?」、「帰ってこれなかったらどうしよう」。このこみちを初めて見たとき、こみちあげてきたのは不安な気持ちばかり。しかし好奇心が上回った私たちは、恐る恐る入って行っった。

瀬中赤坂自治会館側から入ると、最初の10歩くらいは坂になっている。そのあとはずっと、50センチメートルほどの幅で勾配のない道が続く。この短い坂は、『フィールド・ノート』94号でも紹介した「赤坂」だ。

赤坂の先には

坂を登りきってまず最初に目に入るのが、左手に並ぶたくさんの石造物だ。かつてこの道は鎌倉街道として使われていたと、深泉院のかたが教えてくださった。石造物の一つには「馬頭観世音」の文字がある。昔は馬や人がこの道を行き来していたと思うと、いま自分と同じ道を歩いていることがなんだか不思議だった。

石造物を過ぎて進んで行くと、だんだん道が険しくなってくる。クモの巣に引っかかって叫んだり、拾った木の枝で目の前の草をか



①山のなかのこみち。いまでは人が使っているようすはない ②10個ほど立ち並ぶ石造物。なかには「庚申」の文字が刻まれたものも見える ③こみちの途中には植物が生い茂る場所もあった。頭を低くして草をかき分けながら進んでいく(①、②は2018年6月15日、③は2018年6月28日)

きわけたりしながら進んだ。近くで水の流れる音が聞こえたので右手の下の方のほうを見ると、水路(家中川)が流れているのが見えた。耳をすますと遠くのほうから車の通る音も聞こえる。ひとけのない山のなかの道を不安な気持ちいっぱい歩いていったため、ふだんもよく聞く音に安心した。

道の中盤で、突然ひらけた場所に出た。畑の跡地のようだ。トタンの破片やブルーシートが見える。そのまま進んで行くとまた左手に「三三夜」と刻まれた石造物があった。ここから20秒も歩かないうちに、お墓が見えてきた。深泉院の敷地内にある墓地だ。ここどこみちは終了している。

昔は人がいたことを表すような、石造物や畑の跡。いまは人が通らないことを示すような、伸び放題の草や木。それらが、このこみちの時間が止まっているような雰囲気を作りだしている。山のなかから抜けだしたとき、違う世界から帰ってきたような気分になった。

高橋光(比較文化学科3年) 文・写真
中里真琴(大学院文学研究科2年) 文・写真

こみち

どこにつながっているかわからないこみちにワクワクする。

道ばたにある馬頭観音からこみちの歴史に想いを馳せる。

こみちのそばに住む人々の生活を想像する。

こみちの落ち着いた雰囲気に入れ、

ゆったりとした時間を過ごす。

こみちを歩くと、たくさんの楽しみかたを発見できました。

そのいっぽうで、私たちが歩いたこみちは、

舗装されたり、道幅が広くなったりと変わってきたことを

地元のかたから教えてもらいました。

身近にある狭くて細いこみちは

もっと道が広がって、やがて地図に載るかもしれない。

あるいは誰も歩かなくなって、草木に覆われるかもしれない。

そう思うと、今あるこみちを歩いてみたくなるのです。

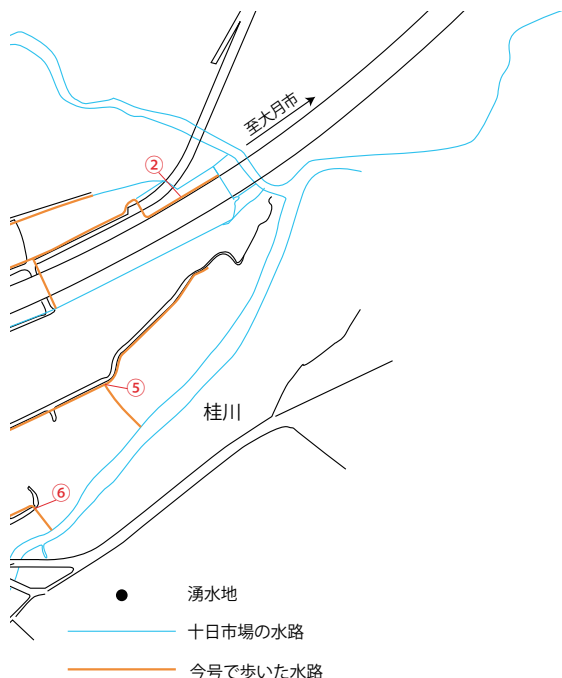


水路を歩く

第2回 根ざす水

都留市には水路が多い。どこもよどみなく流れ、澄んだ色をしている。そんな水路は私の地元にはなく、都留市に越してきたときには驚いた。第2回は、永壽院の湧水地からの道と、個人のお宅の庭から流れている道の2本に注目する。自分の足で歩き、いまの水路を記録したい。

佐藤琢磨(社会学科3年) 文・写真



湧水で米をとぐ

永壽院は十日市場にある湧水地の一つだ。湧水が岩肌から滲み出ている場所や、ホースに導かれて勢いよく水が流れる場所がある。6月24日、住職の奥さんである水庭初枝さんみずにはつえに昔の水路のようすについてお話を聞くことができた。

「昔はお寺の前の水路もいまより広くて、朝起きたらそこで顔洗ったり歯磨きしたりした。そしたら、カジカつて魚がピョピョつて上流に逃げていったのを覚えてる」と水庭さん。昔の水路の使われかたについて尋ねてみた。「いまは下水をちゃんと別の場所に流してるけど、(昔は)お米をとぐのに使ってたりしてたよ」と話してくださった。生活の一部として当たり前に水路があったのだろうと想像できる(①)。

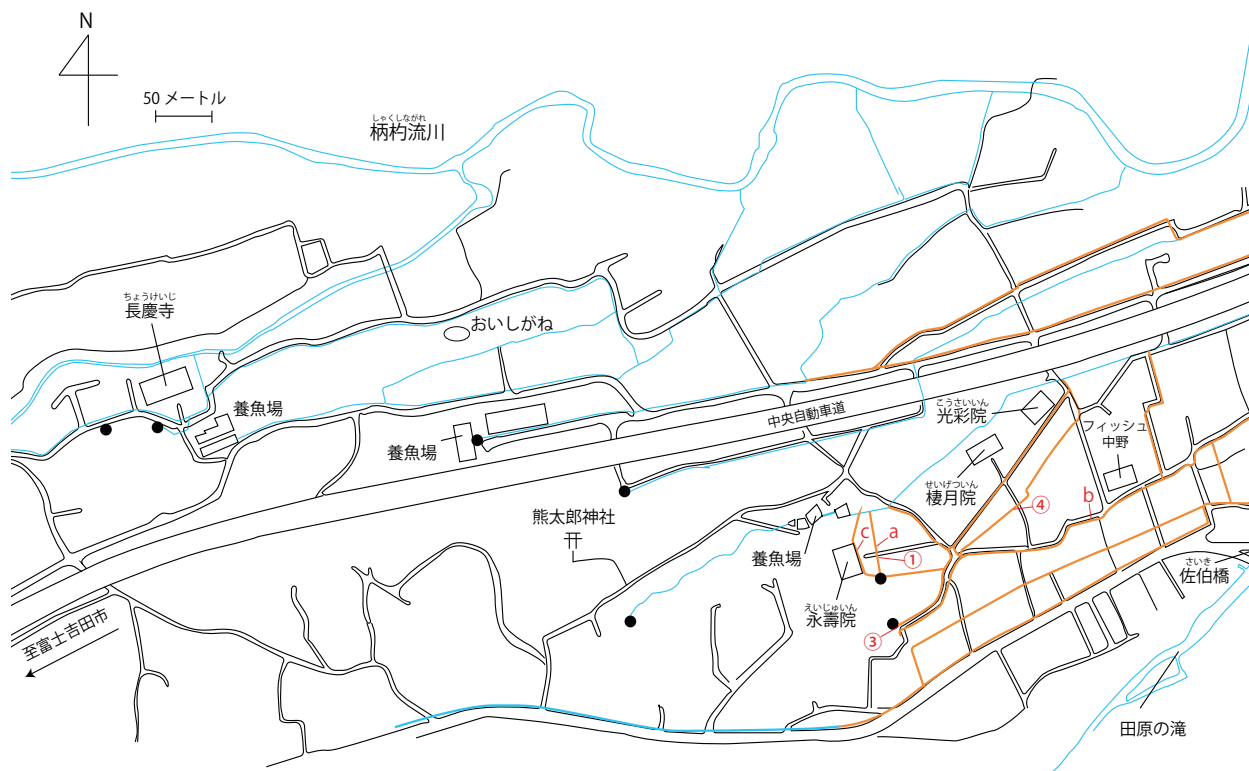
永壽院から流れる水路に沿って道を下流へ歩いていく。あつという間に

に熊太郎神社から流れる水路と合流した。合流した水路はほかの場所よりも水の量が多く、まつすぐ川まで流れ込んでいく。水路は中央自動車道に沿ってつくられていた。

3尺流れたらきれいに

十日市場にお住まいの小俣実さんおまたみの(71)の家の庭からは湧水が流れている(③)。7月2日、庭の湧水と富士吉田市方面から流れてくる水路が合流する場所から歩き始める。下流へどんどん歩いていくと、約20センチのヤマメが泳いでいた。2年ほど前に聞いた話では、漁業組合のかたが放流しているそうだ。

十日市場の昔の水路がどのように生活と関わっていたのだろうか。お住まいの雑賀半治さんさいがはんじ(82)にお話をうかがった。雑賀さんは終戦前の小学2年生のときに都留市へ疎開してきた。それから60年以上を十日市場で過ごしている。いまのように十



②③④は2018年7月2日、①⑤⑥は2018年6月24日

日市場の各家庭へ水道が通る前は、水路の横に「共同水道」があった。そこはいくつもの家庭が一緒に使う上水道の役割を果たしていたそう。水道のメーターもなかったので、決まった人数ごとに共同水道を設けていたという。さらに共同水道ができる以前は、家庭に使う飲み水も水路から得ていた。洗濯にも使われるため、朝早くに水を汲んでおいて、それを1日使うようにしていたそう。

雑賀さんは「熊太郎さんの前のところでは、ドジョウとかサワガニとかカジカがよう採れた。おつきいトノサマガエルもおったけど、いまは1匹もないな」と話してくださった。水路が分岐する地点から、1本北へずれると楼月院^{せうげついん}がある。住職をさ^{うすい}れている臼井弘成^{こうせい}さん(79)に昔の水路のお話をうかがった。楼月院の前を流れる長い川は「くそつかわ」と呼ばれていたという(④)。おむつ

など、汚いものを流すからそう呼ばれていたそう。じつさいに臭かったのか尋ねると「そんなことはなかったな。昔は3尺（1尺＝約30センチ）流れたら（汚いものが）きれいになるっていう言い伝えもあったから」とおっしゃる。白井さんも昔の水路を思い出すように話してください。

「いまはコンクリートの水路になつてるけど、昔は魚捕り専門だった。あみどんぶりをつくって魚をよく捕つてた」と懐かしそうに話してください。あみどんぶりとは、トンネルのような形の網で、魚を追いつみながら持つて歩くものだそうです。「ヤマメ、カジカ、ハヤ、ウグイいろいろなものが捕れた」。70年ほど前のお話だ。いまは見られない水路のすがたが、白井さんから語られる。

さらに下流へ歩いていく。何度か分岐点があったが、基本はまっすぐに水路が伸びている。特徴は、途中で崖から柄杓流川に流れる分かれ道

があることだ。多くの水が崖から流れていき、残った水は速度を落としながら別の水路から柄杓流川へと入っていく（⑤）。途中からは草だらけで進むことができなかった。

地域に住んでいるかたに話を聞いてみると、いまの水路からは読み取れない情報があることがわかった。水路が「くそつかわ」と呼ばれていたこと。共同水路があり、お隣さんと共用だったこと。昔は、人と水路は切り離せないほど密接に関わっていたようだ。だからこそ、地域のかたに水路の記憶が強く残っているのもうなずける。

昔の水路のようすを地域のかたの記憶から読み解いてみると、いまの水路との違いも見えてくる。

水路のことを知るにつれて、私もだんだん水路に愛着が湧いてきた。



(2018年6月24日)

a. 永壽院前の水路に冷蔵庫代わりにジュースが冷やされていた。湧水は年中12℃で流れている



(2018年6月24日)



c

b. 十日市場の共同水道の名残。いまは使われていないが、水路わきに何か所も見られる
c. 永壽院の蛇口。写真右の蛇口が湧水、左が上水道からひいている。観光で来た人に飲み比べをしてもらうそう



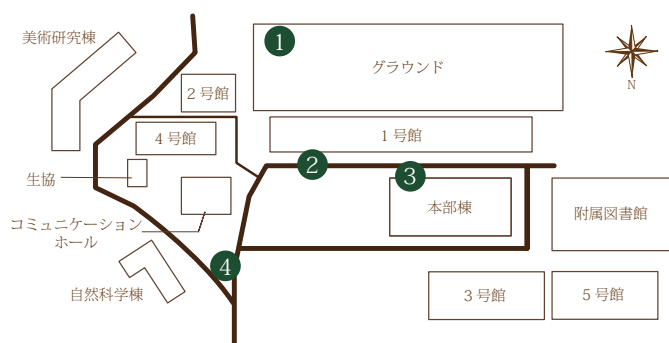
連載 最終回

木に学ぶ春夏秋冬

ほとんど毎日目にする、本学に根付く木たち。自らを語らない生きものの変化に目をやると何が見えてくるのだろうか。自然観察の初心者である私にとって、山に入らずとも、もっとも身近で触れあえるこの木たちと四つの季節を過ごしてみたい。

2017 年 10 月からはじめたこの観察も、残すところ今号の夏だけとなった。一目見ただけでは変化を感じにくい夏の木のように。そして四季を通して 4 本の木から学んだことを記す。

平岡摩梨菜 (社会学科 3 年) = 文・写真



- ① ケヤキ
高さ：約 3 メートル
- ② メタセコイア
約 9 メートル
- ③ イチョウ
約 6.5 メートル
- ④ トチノキ
約 9 メートル

葉が虫に食べられた跡が多くあった。またオトシブミや虫えい(虫こぶ)を発見できた。今までアリのくらしか見たことがなかったけれど、夏にはたくさんの生きものが集まってくるようだ



秋：2017年11月7日



冬：2018年2月2日



春：2018年4月29日



夏：2018年7月19日

4本の木と過ごしてみると

名前だけは知っていたケヤキ。この木は、本学の学長だった太田^{おおた}堯^{たかし}先生のご自宅にもともと植えられていて、2004年7月15日に本学に移された。そのことを観察をはじめた当時に知った。移植されたケヤキの高さは約3メートルだ。長く根付いているケヤキと比べると、きつと背は低いのだろうと、漠然と思った。それから少し経ち、葉にギザギザと切れ込みが入っていることや、細かく枝分かれしていて木全体が竹ぼうきのようなかたちをしていることなど、ケヤキと判断するためにの私なりの材料を発見した。

それからは都留市内を歩けば、ケヤキをすぐに見つけられるようになった。学外でケヤキを見つけたら、無意識に観察中のケヤキと比べていた。ケヤキを見つけては、横に並んでみる。そうしてやっと、「観

察しているケヤキは本当に背が低いんだ」と身をもって感じる事ができた。

名前も存在も知らなかったメタセコイア。私は初めて図鑑を開き、拾ってきた葉と見比べながら名前を特定した。名前を知ったら愛着が湧くまでは早い。授業中になにげなく窓の外を見ても、見飽きた風景が広がるばかりだったのに、観察をはじめてからはメタセコイアをじーっと見てしまう。葉や枝が大きく揺れていけば風が強いことが、雪に埋もれた幹を見れば雪の積もった高さがわかる。いつの間にかメタセコイアは、教室内から外のようなすを把握する私の物差しになっていた。

一番に紅葉を連想していたイチヨウ。ほかの3本の木とは違って、イチヨウは私にとって「知っている木」だった。しかし秋が過ぎると「知らない木」に変化する。イチヨウの冬芽なんて見たことがなかった。そこから、芽鱗^{がりん}の殻を破り2センチほ



秋：2017年11月17日



冬：2018年2月2日



春：2018年4月29日



夏：2018年7月19日

イチョウ

春には若草色だった葉が、濃く変化した。葉の量が増え重みが増したことにより枝が下がっている。木全体を見ると横に広がって見えた



秋：2017年10月30日



冬：2018年2月2日



春：2018年4月29日



夏：2018年7月19日

どの葉が少しずつ伸びていくようすは、赤ちゃんが生まれるシーンを見ているようで、今までにない感動を覚える。

葉が大人になっていく過程は、片時も目が離せない。1年経つてみれば、紅葉以外にも心揺さぶられる瞬間はたくさんあることがわかる。長く生きているあいだの紅葉の瞬間だけを見て、イチョウを「知っている」だなんていえなくなった。

名前とそのすがたが一致しなかったトチノキ。トチノキが生えている場所は、毎日通る場所ではなかったため、週に1回観察するようにしていた。冬芽はどれくらい膨らんだだろうと期待しながら見に行くと、すでに葉が伸びていたり、花はもう咲いたかなと思えば木を見上げると、実を付けていたり。何度も予想を超えてくる。目を見張る成長ぶりを逃さないために、観察の頻度を3日に1回に変えた。すると、驚きも発見も観察の回数と比例して増えた。トチノキはす

がたを変えるのが速い。そのスピードに合わせてうまく接していけば、小さな変化にも気付けるようになった。

自らを語らない生きものの変化に目をやると、そこには学びがあった。比較して違いがわかると、そのものの特徴がわかる。揺らがずそこに立ち続けるものは標^{しるし}になる。知ったふりは新たな発見を逃し兼ねない。向き合いかたを変えれば気が増える。どれも季節が移りゆくなかで、同じ場所にたえずむ木のすがたから学ばせてもらった。

木は言葉をくれない。しかし距離を詰め、長い時間をかけて観察し、変化を一つひとつすくい上げていけば、必ず何かを教えてくれる。

卒業するまでにあと6回季節は変わる。そのあいだに、私はどれくらい木から学ぶことができるのだろうか。

秋：2017年10月26日

冬：2018年2月2日

春：2018年4月29日

夏：2018年7月19日



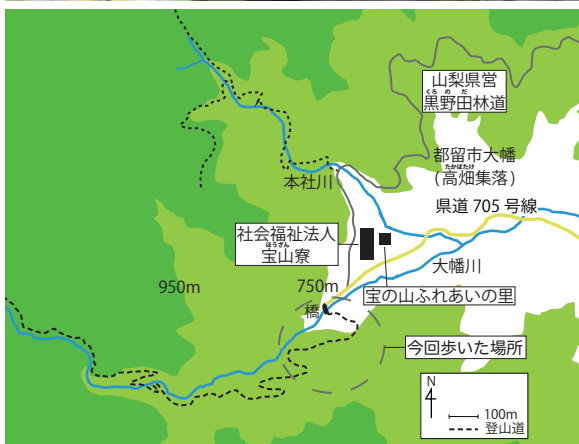
トチノキ

春になりはじめていた実はみるみる大きくなり、現在は直径5センチほどになった。実が大きくなったことで重みに耐えきれなくなり、枝が曲がっているものもあった



大幡の恩賜林に 足を踏み入れる

橋から見える大幡川 (2018年6月23日)



▲今回歩いた場所の地図

都留市の西部、大幡地区の高畑集落には「恩賜林」と呼ばれる県有林がある。都留市の市街地より標高が200メートルほど高く、山深い場所だ。気温も市街地に比べると低く、市内にいるという感覚を忘れてしまう。この森林で観察を続けると何に会えるのだろうか。単純な興味から、私は梅雨に入る前の5月から2か月ほど観察を続けた。

小泉篤広(社会学科3年)=文・写真

「恩賜林」とは山梨県が明治時代に度重なる水害に襲われたことから、明治天皇のお氣遣いにより、県に御下賜された森林のことだ。現在は県有林として管理されていて、この森もその一部だ。大幡川にかかる橋のたもと看板によって私はそのことを知った。

恩賜林に入ると

5月19日。この日の気温は25度ほどだ。晴れているが湿った空気があったりに漂い、蒸し暑い。恩賜林内の道は三つ峠山への登山ルートにもなっている。しかしこの日は誰にも会うことはなかった。

橋を渡ると、すぐのところでもフタリシズカを見つけた。地面から、20センチ以上ある大きな葉を伸ばしている。それが私の目にすぐ飛びこんできた。フタリシズカの花はすでに散っていて、ボールペンの先くらいの実をつけていた。観察や写真を撮っているあいだも、「サー」とい



①フタリスズカ。1房に実が10個ほどついている ②ウツギの花。23日に訪れたとき、咲いていたのは数輪であった ③ウツギの実。花が散ったあとに見られた ④シモツケの花。1輪の大きさは1センチほど ⑤シモツケの花は完全に散ってしまった(①、②、④は2018年6月23日。③、⑤は2018年7月4日)

う大幡川の水音が絶え間なく聞こえてくる。

100メートルほど進んだところで川の水音よりも大きな「ジイー」と鳴くハルゼミの声が聞こえてきた。初夏を思わせる陽気であったので「ハルゼミ」というよりも「シヨカゼミ」という名前が似合いそうだ。

通い続けての発見

6月初旬に梅雨入りが発表された。くもりがちな天気の中なかで観察を続ける。特に印象に残っているのは6月10日から17日にかけての花の変化だ。10日にウツギの花が咲いていることに気づいた。5月にはまだ咲いていなかった花だ。季節の移り変わりが見てわかる。橋の手前10メートルほどのところでシモツケの花も見つけることができた。

17日に再び訪れてみると、ウツギの花は半分くらいになっていた。雨で散ってしまったのだろうか。反対にシモツケの花はまだ散っていない。

い。同じような高さに花を咲かせる植物でも、花が散るまでの期間の長さが異なる。変化のちがいに驚いた。

7月4日。梅雨は明けたが、この日は雨模様。ウツギやシモツケなど以前に出会った植物をもう一度探す。シモツケの花は散っていた。ウツギは、直径1センチにも満たない小さな実をつけている。ヒグラシの鳴き声も聞こえた。

約2か月間、恩賜林に通い続けた。植物が花や実をつける。虫の鳴き声が変わる。そうした変化を観察してきた。恩賜林に通おうと思っていた当初、こんなにも季節の移り変わりが観察できるとは思ひもしなかった。通うたび、変化の速さに驚かされる。自然の営みのなかで私が観察した期間は本当に短いだろう。しかし、恩賜林に通い続けることで、私は季節の移り変わりや植物の変化をじかに感じ取る楽しさを教わった。

都留の風景写真集 - 初冬の候 -

天気や時間によって表情を変える都留のようすを
みなさんにお届けします

今号の担当：山内利奈（社会学科4年）



#1 04:42 十日市場



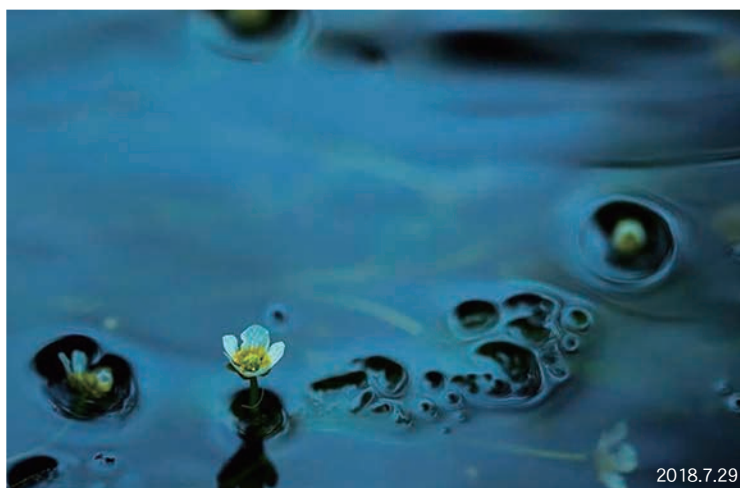
2018.6.29

#2 19:07 夏狩



2018.7.29

#3 16:12 夏狩



2018.7.29

#4 17:42 夏狩

真福寺の大カヤ

幹が太くて枝葉の勢いがある

都留市小野^{おの}にある真福寺^{しんぷくじ}にはカヤの木がある。山梨県で1、2を争う大きさを誇ると知ってその「大カヤ」に興味を持った。真福寺の住職である亀澤泰隆さん^{かめざわやすたか}（63）と泰隆さんのお母さんの布二子さん^{ふじこ}（91）にお話をうかがうと、大カヤと地域の人たちの昔のようすが見えてきた。

真福寺の大カヤは山梨県の天然記念物に指定されている。昭和46年12月の山梨県教育委員会の調査によると、根の周囲が7.8メートル、幹の周囲が6メートル、樹高は16.3メートルだ。昭和34年の伊勢湾台風で地上9メートルのところで先端が折れたが、四方八方に伸びる枝が今も旺盛で迫力がある。

真福寺の本堂へと続く石段を上がって右側に大カヤはある。石段を登って空を見上げると、長く伸びた枝にしげる葉で一面が覆い尽くされる。かろうじてうつすらと木漏れ日が差すくらいだ。

真福寺は明治時代に二度の火災に見舞われ、お寺に関しての資料は残っ

ていない。だからカヤがいつからここにあるか、はつきりとはわからない。布二子さんが70年前に嫁いできたときも、泰隆さんが生まれたときも、当り前のようにカヤはそびえ立っていた。

大カヤと遊び

布二子さんと泰隆さんに、大カヤとの思い出をうかがった。布二子さんは「カヤに縄をつるして登って遊んだよ。ハシゴを掛けて登ったこともあるけど、カヤが大きいからハシゴが足りなくてね」とおっしゃる。大カヤの太い枝がとなりのサワラにかかっている、そこを渡って歩いた人もいたそう。「となりの木まで太い枝を渡って行つたこともあったね。今思うとすごいよね、落ちちゃった人もいたよ。誰だっけ」と当時を振り返って布二子さんは懐かしそうだ。当時の人にとって昔はお寺が遊び場だったそう。本堂が建てられる前は野球をしたり、大カヤに登って遊んだりしていた。布二子さんはカヤ

の実を茹でて食べたこともあるそう
で、「渋くて渋くてね。おいしいなん
でもんじゃないよ」と苦笑いを浮か
べていた。泰隆さんも「おねしょに
効くとか言われてたよね。カヤの実
が落ちると掃除が大変だよ」と笑っ
ていた。

今と昔では子どもたちの遊びかた
が大きく変わり、今はカヤで遊ぶこ
とはない。大カヤのまわりは草が生
いしげっていて踏み込んでいいの
不安になるほどだった。当時、お寺
がはしやぐ子どもたちでいっぱい
なっている情景を思い浮かべてみる。
大カヤは、子どもたちに囲まれて生
きいきしていただろう。

もう見られない光景

今から10年ほど前、真福寺の本堂の
前にイチヨウとマツがあった。当時は
大カヤ、サワラ、イチヨウ、マツ、の
順に滑空するムササビが見られたそ
う。「息子が小学生のころ自由研究の
テーマをムササビにして、ずっと観察
をしていたときもあった」と泰隆さ

んはおつしやる。大カヤがムササビの
ねぐらとなっていたそう。ムササビが
訪れる条件は、ねぐらとする大きな木
とエサ場となる山が密接しているこ
とである。そのあいだにある木を使っ
てエサ場の森とねぐらの木を行き来
する。ムササビが見られるなんて珍し
いことだ。残念ながら滑空のときに留
まるイチヨウとマツがなくなつてム
ササビは見られなくなつた。康隆さん
は、「ムササビなんてなかなか見られ
ないよね！からだの皮膜を広げて飛
んでいて迫力があつたよ」と、ムサ
サビを見たときの感動はまだ忘れて
いない。大カヤがなければきつとムサ
サビも真福寺にすがたを現すことは
なかっただろう。大カヤから勢いよく
滑空するムササビを、私も見たかつた。

一見力強く立っているが、今では
幹の中身がスカスカで、となりのサ
ワラに支えられて立っているそう
だ。脆くて弱くて心配になつてしま
う。「大カヤ、頑張っているよね」。

そう康隆さんがおつしやつた。弱い
部分を表面で隠して一生懸命立つて
いるようで、なんだか胸が締めつけ
られる。

康隆さんと布二子さんに大カヤ
に思い入れはあるのかうかがうと、
「うーん、ずっと当たり前みたいに
あつたから、思い入れつていうのは
ないなあ。地域にとけこんでるよね」
とおつしやつた。大カヤは真福寺と
地域に当たりまえの存在となつて、
時代とともに生長を続けていた。

宇佐美温加（社会学科2年）＝文・写真



①人とカヤが並んだようす。写っている人の身長は164センチ ②幹のなかが空洞であることがわかる ③枝が絡まってクネクネしている







No.6 滝で涼みに上夏狎へ

なにげない小道でも、
のんびり歩けば
すてきな景色がみつけられます。
あなたも都留を
てくてくお散歩してみませんか。

今回は太郎次郎滝をめざして
上夏狎地区を歩きました。
トンボや虫、小さな社や道祖神。
出会いと発見にあふれる散歩道です。





講座が終わっても乾き具合を見に、何度も教室に足を運びます



受講者が作った器をカゴに並べる渡邊さん。1か月ほど乾燥させて、焼き上げる



作るって たのしい



ふだんはあいていない扉がこの日はあいていた。気になってのぞいてみると陶芸教室が開かれていた。その建物は「都留市まちづくり交流センター」の駐車場内にある。風通しのいい空間と受講者の笑い声に惹かれた私は、6月19日におこなわれる陶芸教室に参加することにした。

江利そらむ（社会学科3年）＝文・写真

陶芸教室に集う人

6月19日、私は「はつらつ鶴寿^{かくじゅ}大学（旧称…老人大学）」の陶芸教室に参加した。「はつらつ鶴寿大学」は明治100年を記念して都留市教育委員会主催のもと1968年にスタートした。60歳以上の男女に向けてさまざまな学びの場を提供する。現在は23の講座があり、103名が在籍しているという。陶芸教室は1992年から続く。私が陶芸教室



陶芸室の外観。9時30分に教室がスタートする

を訪ねたとき、受講者は8人で欠席者は1人もいなかった。

使えるものを作る

「ここで作ったものは家に持って帰って飾るものではありません。じつさいに使うものです」。受講者への挨拶として、参加者に伝える渡邊^{わたなべ}長重^{ながしげ}さん（88）の言葉が印象に残った。40年前、中学校教師だった渡邊さんは、クラブ活動で生徒に指導するため独学で陶芸を覚えたという。当初は、ろくろ^{ろくろ}を回しながら中心を捉えること、器の厚さを均一にすることが難しかったそう。だろくろとは回転する円形の台のことをいう。台の上に粘土を置き、回しながら形を作る。1年間毎日のように作り続けて、思うように作れるようになった。1992年に教師を退職後、生涯学習活動の一環として西桂町や富士吉田市、都留市と各地で陶芸の指導を始めた。都留市からの要望を受けて成人式のお祝い品を作



教室内のようす。受講者のほか学生ボランティアのすがたも見られた

ることもあったそう。

陶芸教室は、窯から材料の土にいたるまですべてを市が管理している。そのため講師である渡邊さんはここで器を作っても、家に持って帰ることはしないという。教室のなかには渡邊さんの作った器が積み重ねて置いてある。どの器も丸みや厚さが均一に作られており、器の手触りを確認したくて思わず手に取る。

使っている自分を想像して

教室では材料となる土のブロックが渡され、それを一センチほどの厚さに伸ばしていくことから作業を進めていく。受講者は初めて陶芸をする人がほとんどだ。最初のうちは戸惑っているようだった。けれど、手を動かしていくと「これは漬物を入れる皿にする」などと、具体的な使いみちを受講者同士で話し合っていた。

渡邊さんはテーブルを囲んだ受講者を一人ひとり見ながら、気に

なった人の手助けをしていく。形がほとんど出来上がっている人の隣に立ち、「それじゃあ、厚すぎるよ。もう一度丸めて」と、声をかける。その男性はほかの人より早く進んでいたぶん、残念がっているように見えた。渡邊さんは土を丸めなおして男性のイメージを形作っていく。前よりもきれいな仕上がりになった器を見て、男性は「また、趣味が増えちゃうな」と、照れながら渡邊さんを見上げる。

作りたい形の土台に、伸ばした土を被せると、自分の想像していた器へと一気に近づいていく。器を見つめる受講者の表情は誇らしげだ。何を入れようか、持って帰ったら家族からどんな反応が返って来るだろうか。焼き上がりを前にして、すでに焼き上がった後の器を思い浮かべているようだった。

渡邊さんの陶芸教室は、自分の器を作るたのしさを教えてくれる場所だ。

前編

さんちよつを見つめる

3 清野茶店



「誠心誠意」

4 下着専門店 サンワ



「品質第一」

5 舟久保たばこ店



「愛煙紫煙」

三町商店街は、都留市駅付近の横町、田町、栄町の三町からなる商店街だ。2018年7月の時点で、この三つのまちにある商店30店舗が三町商店街に加盟している。「商店街ができたのはもう、俺たちの親父たちの世代だねえ」。そう話すのは、衣料品を売る大国屋の店主である国井武彦さん（74）だ。昭和24年の谷村の大火で三町一帯は焼け野原になってしまった。そこで国井さんのお父さんたちの世代が

「あのお店、移転しちゃったんだ」。「あ、ここに新しいお店ができてる」。都留市を歩くときや、地元で散歩するとき、少し見ないあいだにまち並みの変化に気づくことがある。いま私の目で見ることのできるまち並みを記録したい。そう思い、都留市の三町商店街を歩いた。前編では昔のお話と、私が見た三町商店街について記録する。

まちを盛り上げようと考えたのが、「十三の市」だそう。これは昭和24年5月13日に始まり、いまでも続いている。毎月13日になると、加盟店が店先に十三の市と書かれた旗を出し、特売品を売る。この十三の市がきっかけとなって、まちの商店街が三町商店街として連携していくことが決まったそう。

商店街の昔といま

大国屋を26歳のときに継いだ国井さんは、商店街ができた当時のことを語る。「昔は商店街で企画した招待旅行をしたりね。成田山（千葉県成田山新勝寺）とか行つたんだよ。お客さんがこんなに喜んでくれるのかって嬉しかった。いい思い出だね」。

都留市の中心地として栄えた三町

13 サイクルセンター カワベ



「言行一致」

10 植松肉店



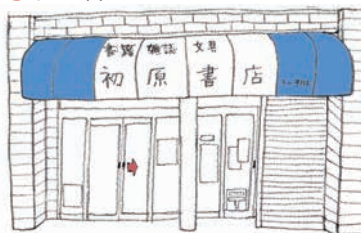
「天真爛漫」

11 土屋たばこ店



「一意専心」

12 初原書店



「書誌貫徹」

三町商店街スケッチ（前編では中央一丁目の交差点から都留市駅側を取りあげています）

★三町亭



加盟店はそれぞれ経営コンセプトを四字熟語にして店先に掲げる。なかには店主が独自に作った四字熟語もある



三町商店街の休憩所。二階は教養教室などが開催できるスペースになっている

① 中華料理蘭月



「日進月歩」

② スーパーウスイ



「新鮮良品」

商店街。かつては道志村からもたくさんの方が来ていたという。「朝一番のバスも、夕方ごろのバスも、人がいっぱいいたよ」と国井さん。

いまは空き地が多く、廃業したり移転したりするお店が毎年あるのだそう。私は月に一度くらいのペースで三町商店街を訪れるが、若者に会う確率が本当に低い。よく見かけるのはお年寄りだ。

通りには人が多いイメージはないけれど、お店のなかをのぞくとお客さんが何人かいるのをよく見かける。いつ見ても、お店の人とお客さんが楽しそうにおしゃべりしている。「大きな何かじゃなくて、毎日のお客さんとの関わりだね。あとき買ったあれよかったよ、とか言われるのが本当に嬉しいね」。国井さんが目を細めながら言ったことを思い出した。

後編では、いまの三町商店街がお客さんどのような関わりかたをしているか、掘り下げていく。

高橋光（比較文化学科3年）Ⅱ文・写真・絵



⑥ クリーニングムトウ



「信用技術」

⑦ ドリームショップとみなが



「和気藹々」

⑧ かざま 風間商店



「飲酒満腹」

⑨ おおくに 大国屋



「心気一店」

「いつか」をめざして



富士急行線^{やむら}谷村町駅を出て右手の細い道を歩いていくと、古民家が見えてくる。玄関の近くには「popppoya」と看板がかかっていた。こんなところあったっけ、と調べてみると2018年2月23日にオープンしたばかりの「宿ぽっぽや」だった。興味をひかれた私は、女将の鐘ヶ江^{かねがえり}菜さん（33）をたずねた。

「宿ぽっぽや」は古民家をリノベーションしたゲストハウスだ。入り口の引き戸の先は土間になっている。居間には畳が敷かれ、年季の入った蓄音機や桐だんすが置かれていた。居間に面した窓からは富士急行線の線路が見える。電車が通るたびに、踏切の音や電車が揺れる音が聞こえてきた。

形となって表れる

「ゲストハウス自体に泊まるのが大好きで家族連れでゲストハウスによく泊まりに行っていた」と鐘ヶ江さんはいう。けれどゲストハウスは、一人で旅をしている人向けのものが多い。「家族向けのゲストハウスがないので、家族が集まって会話できる場所があったらいいなという思いがあった」。そうしてできたのが「宿ぽっぽや」だ。

また、「都留の魅力を知ってもらいたい」という思いもあったそう。「宿ぽっぽや」では夜ご飯を都留市内のごはん屋さんで食べてもらうようにしている。都留のごはん屋さんを紹介するために、マップを手作りました。ほかにもマップでは近くの寺社や自然を紹介している。『朝早く起きてしまったのでランニ



アルバイトのかたがパソコンで作ってくれたという地図。ただ地図にお店を載せるだけでなく、じっさいにお店で食事をしてから作ったそう

「家族向けゲストハウス」のため工夫
 ングで勝山城跡に登ってきました』とか、『子どもと川に足入れてきました』っていう家族もいて。お客さんに都留市を知ってもらうために、マップは効果的にはたっているようだ。

ゲストハウスはほかの宿泊施設とくらべて人との距離が近い。「泊まりに来た子どもたちがすぐね、お友だちになって。『さみし

いなあ』とか『またねえ、バイバイ』とかいう感じで。1日でこんなにも仲良くなるんだなあって」。さらにお客さんと従業員が一緒に呑むこともあるという。お客さん同士、さらにはお客さんと従業員の距離が近い、ゲストハウスならではの出来事だ。

「ふつうのホテルとかだと泊まったとしても会話しないじゃないですか、ほかの家族とでもここは会話せざるをえないので」。部屋のなかにお風呂やトイレはなく、共用になっ

ている。あえて作らないことで、お客さんが部屋にこもりきりにならないようにしている。朝食もみんなで同じ場所で食べることにしているという。

家族で泊まりやすい宿泊施設になるよう、料金にまでこだわっているそう。「一部屋あたりが16000円なの。一人で泊まろうとすると16000円って高く出て出さないから、一人の人が来ないような値段設定にして」。家族のなかに一人客だったり、一人客が二組いるなかに一家族だけだったりすると、少しさみしい。そうならないために、必ずどの組も家族で埋まるような値段設定にしているという。

土日は家族のためのゲストハウス。いつも平日は一人客向けにドミトリとよばれる相部屋を提供している。一人旅をしている女性や、鉄道好きなかたなどが利用しており、リピーターも多いようだ。

「やりたかったこと」と「思いつき」

鐘ヶ江さんは昨年5月まで日本航空株式会社の客室乗務員だった。「エコノミークラスだと一人50人くらい持つの。お客さまのリク

エストやご希望があるとしても、その人のご希望に応えていると、ほかの50人が待たされちゃう」と当時をふりかえる。「目をつぶらなきゃいけないこともあるし、たとえば規則とかもあつて、『今日は空いているから、じゃあ自由に使つて』って、私の宿だったらいえるけど、日本航空だったらいえないじゃない。そういうのもあつて。いまの「宿ぼつぽや」という形については、「(全部屋に)泊まつても3組だし、目の行き届く範囲でお客さまにあつた個々のサービスができるのは、満足感がありますね」と話す。

鐘ヶ江さんはやりたいことを実現するために、しっかりと計画を立てて宿屋を営んでいるように見えた。客室乗務員のころから構想はあつたのだろうか。うかがってみると、「構想何年とかいうけど、ないですね。つねに思いつき。困るよね」と笑う。楽しそう、面白そうと思つたことをどんどんやっているようだ。

古民家を使おうと思つた理由についても、「地域の空き家を活性化とかそんな思いではなくて。ただ好きだから」という。富士急行線の車掌を勤める旦那さんの影響で、鉄道も好きなのだそう。「宿ぼつぽや」には鉄道の要



左:築80から90年ほどの古民家。「あたしが住んでた家なのよ」と近所に住む100歳のおばあちゃんが教えてくれたそう。中:線路に面した窓から見える風景。風がよく通り、葉っぱがさやさと揺れる音が聞こえた。右:鉄道関連のものがあちこちにある。壁の黒板は子どもたちが自由に絵を描く(すべて2018年6月14日)

素がいつぱい詰まっている。どこを見ても鐘ヶ江さんの好きという気持ちが伝わってくる。

「妄想」が実現していく

鐘ヶ江さんのなかでは、やりたいことがつぎつぎと生まれている。「(宿のなかに)線路があるんだけど、ここに電車を走らせたっていう妄想。子どもたちが乗って、キコキコキコつて動かして、荷物を宿泊棟まで運んで」。裏もまだ敷地があるんで、とりあえず駅舎にしたくて。で最終的には谷村町駅となげてとかいつてたけど(笑)。

これからのことについて、鐘ヶ江さんは「妄想」という言葉をよく使っていた。「妄想」というと現実味が薄いように感じてしまう。だけど鐘ヶ江さんは、その「妄想」をいつかきつと実現させるだろう。

鐘ヶ江さんはやりたかったことを形にするためにじっくりと思考している。手作りのマップや家族向けゲストハウスは、やりたいことが形となったものだ。そのいっぽうで「好き」とか「面白そう」とか、気軽な気持ちで動けるような行動力ももっているかただ。

杉浦茜(国文学科3年) 文・写真

Field・Note News

2018年3月から7月までの『フィールド・ノート』編集部での活動をお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

春の駅展



本学フィールド・ミュージアム部門では、富士急行線都留文科大学前駅の待合室で展示をおこなっています。展示替えは年に4回あります。春は郡内織を展示しました。郡内織とは富士吉田市や大月市、都留市を含む山梨県の郡内地域で生産された織物のことです。現在は郡内織の文化がなくなりかけています。そこで郡内織のよさを多くの人に、とくに若い人がたに知っていただきたいと思い、展示をしました。今後の展示にもぜひお立ち寄りください。(高橋未瑠来)

ブックレット
を
発行しました

『フィールド・ノート』ブックレット第3弾となる『記憶を紡ぐー都留の織物と養蚕ー』を発行しました。今回は都留市で古くからおこなわれている織物と養蚕に焦点を当てています。別の時期に別の学生がおこなった聞き取りではありますが、つなげて読んでみることで市内に根付いていた産業の物語を感じることができました。かつて都留市に住んでいた人々の暮らしぶりや働くことへの心意気を、ぜひ多くの人に知っていただけたら嬉しいです。(伊藤瑠依)



ムササビ 観察会



5月26日と6月8日にムササビ観察会をおこないました。都留市鹿留の今宮神社で観察をしたあと、本学の地域交流研究センターでミニ講座を開催しました。雨が続き天候が心配でしたが、無事晴れて今回は3頭のムササビの滑空が見られました。寝転がって観察したり、フンを探したり、和やかで楽しい観察会です。次回の観察会は秋におこないます。何頭のムササビと出会えるのか、今からワクワクしています。(宇佐美温加)

フィールド暦

梅雨が来たと思えば、あっという間に夏です。6月から7月のあいだに出会った生きものたちも心なしか夏の暑さに慣れないようすでした。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



ゴマダラカミキリ 本学図書館横のエノキにて。光沢のある背についた黄色の斑点が特徴です(2018年6月27日)



アナグマ 都留市田原にて。近ごろ本学周辺で確認されるようになりました(2018年6月12日)



ハスジカツゾウムシ 都留市十日市場にて。鼻が太いのが特徴です。体長は10ミリほどです(2018年8月1日)



キセキレイの巣 本学4号館横の植え込みにて。卵を温めている最中のような様子でした(2018年6月8日)



ウスバカゲロウの幼虫 都留市十日市場のこしげ小篠神社わきにて。アリの体液を吸って約1年から2年でさなぎになれます(2018年6月27日)



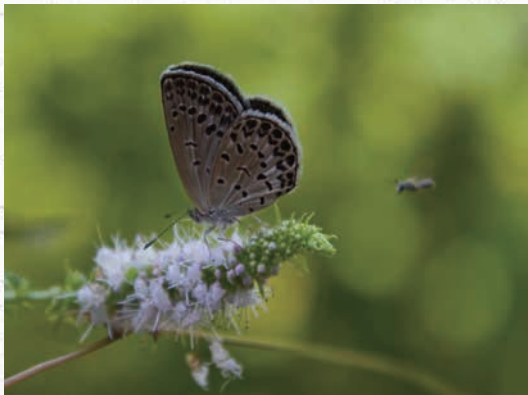
ウスバカゲロウ 中屋敷フィールドにて。うす暗い草むらで出会いました(2018年7月18日)



キタテハ 本学にて。草地を飛んでいました。幼虫はカナムグラがおもな食草です(2018年8月2日)



オオムラサキ 本学4号館前の花壇にて。羽化したばかりのオスの個体で羽の紫色が見事です(2018年7月3日)



ヤマトシジミ 本学の草地にて。カタバミが生えている場所で発生します(2018年8月2日)



ダイショウセリ 本学にて。林縁の陽当たりのよい場所を飛んでいました(2018年8月1日)



エゴネコアシ 本学にて。エゴノキの脇芽にエゴネコシアブラムシが作った虫こぶを、猫の足に見立てて呼ばれます(2018年7月17日)



エゴツルクビオトシブミ ムササビの森にて。エゴノキのある環境で見られます。首が長いのはオスです。体長は10ミリくらいです(2018年7月17日)

はじめの 一歩 新たな出会い 新たな発見

都留市にきて約5か月。私たちは今まで気にしていなかったことに少しずつ目を向け始めました。

雨上がりのまちにはいつもと違った表情があること。道端に生えている植物にも私たちと同じように個性があること。通り過ぎただけだった駅や道路にも歴史があること。注意していなかったものに目を向けることで新たな出会い、新たな発見があります。『フィールド・ノート』編集部に入って、そんな出会いや発見を記事の形にしていくことへの楽しさを覚えました。この記事は、そんな私たちのはじめの一歩です。



クモの巣を撮影していると、ちょうどクモが姿を見せた。
15センチほどの巣(2018年6月17日)



草の上に点々と広がるクモの巣のようす。30センチほどの巣(2018年6月17日)

雨の日の楽しみ

梅雨の時期は気分がどんよりするのであまり好きではない。ある日、雨上がりの学内を歩いていると草木のところが光っていることに気がついた。陽の光によってクモの巣と絡み合う雨粒が光り輝いている。

図鑑で調べてみると、巣の製作者はクサグモだと判明する。林縁に多く生息していて、おもに葉っぱの上にシートのような形をした巣を広げるようだ。数分間クモの巣を眺めていると、クモが現れた。目が合う。体は、私のほうが何百倍も大きいはずなのに、クモが急に姿をみせるものだからこちらのほうが驚いた。クモは私をみるなりそくそと葉の下に隠れた。怖がらせてしまったようだ。

巣の観察を再開する。巣は15センチから30センチ程度のものまであった。繊細そうな糸にみえて、触ってみると意外と頑丈で少し粘着力がある。そんなクモの巣に絡みつくと雨粒は、葉を揺らしたり、巣に息を吹きかけたりしても、そう簡単に落ちはしない。

やがて、太陽が雲から顔を出し始めた。クモの巣はよりいっそう輝きをみせる。目が痛くなるほどだ。苦手な雨の日の楽しみをみつけた。

おどろきの出会い

7月6日、本学のうら山を初めて歩いた。

「この葉っぱ、ちぎって匂ってみてごらん」。

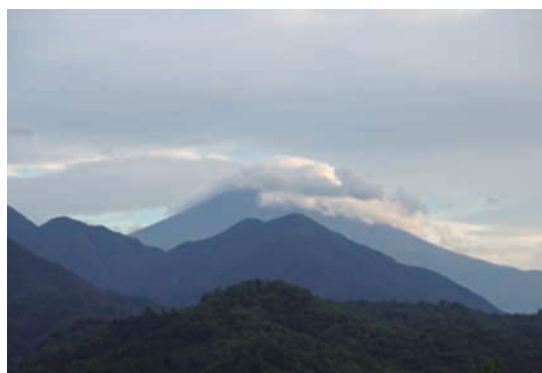
そう言われちぎった葉っぱはクロモジ。日陰にひっそりと生えていて、身長150センチの私の視線と同じ高さにある。葉っぱは私の15センチほどの手のひらよりひと回り小さく、濃い緑色をしていた。さわってみるとつるつるしている。どこにでもありそうな葉にしか見えない。不思議に思いながら匂いをかいでみると、レモンのような柑橘系の爽やかな香りがした。匂いをかいですぐに、私が愛用している虫除けシールと同じ香りがするのことに気づく。こんなにいい香りがする葉っぱがあることを知らなかった。私にとってはおどろきの出会いだった。

もともと私は虫が苦手で、山など虫がいそうな場所へ足を運ぶことがなかった。しかしクロモジとの出会いにより、うら山が私にとって何も知らず関心のなかった場所から、興味がわき目を向けてみようと思える場所になった。最近ではうら山に行くと、無意識にクロモジはないかときよろきよろしている。一つの小さな出会いが私に大きな変化をもたらした。

中島華奈美（地域社会学科1年）Ⅱ文・写真



一見どこにでもありそうな葉っぱ、クロモジ（2018年7月8日）



横吹橋より見えた笠雲。薄暗くて湿った日だった（2018年6月26日）

きっかけは笠雲

空を見上げればどこにでもある雲。都留市は天気が変わりやすいので、雨が降らないか心配でよく空を見上げるようになった。どこかで湧き上がり、流れ、消えていく。絶えずその営みを繰り返している雲がおもしろくて、雲について調べてみた。

すると、都留市内で見られる笠雲がきれいだという。笠雲の名前は知っていたが、じつさに目にしたことはない。この目で見なくては。そう思い、6月27日の18時ごろ都留市下谷にある横吹橋（よこぶき）に行くと、富士山にかかる笠雲を見ることができた。前もって決めていた日より早く出かけたのが幸運だった。都留市の変わりやすい天気を察知できたようで、私の気持ちは少し高ぶる。橋から見た初めての笠雲は、今でもよく覚えていてるほど心に残っている。

笠雲を通して私の内面に小さな変化が生まれた。身の回りの多くのものに興味を示していた幼いころの好奇心を思いだす。きっかけは大きな笠雲だけれど、この気持ちを足元の小さなものに向けていきたい。

柿瑞穂（地域社会学科1年）Ⅱ文・写真

街に来たカワガラス

雨の降る6月18日、ミュージアム都留の前を流れる用水路に沿って、北東に歩いていった。20メートルほど先を見ると、左手前方の用水路の柵にこげ茶色の鳥が止まっていることに気がついた。スズメより大きく、ハトよりは小さいくらいで、体長20センチほどに見える。ピンと上がった尾羽を何度かフリフリと上下するようすが、リズムに乗っているようかわいらしい。

図鑑で調べてみると「カワガラス」という溪流に棲む鳥だとわかった。なんと溪流などではか会えない鳥だったのだ。カワガラスを見かけた用水路をのぞいてみると、きれいな水がザーッと音を立てて流れていた。この用水路のおかげで、街なかでありながらカワガラスに会えたのだろうか。カワガラスを通して、都留市の水の豊かさをあらためて感じることができた。

それからは、生きものに注目して道を歩くようになった。生きものが一般的にいる場所と生きものを見かけた場所を比べてみると、新しい発見や気づきがあるかもしれない。自然に目を向けることのおもしろさをカワガラスが教えてくれた。

長田じゅりあ（国文学科1年）〓文
小俣溪和（大学院文学研究科1年）〓写真



都留市十日市場で撮影したカワガラス。成鳥になるともっと全体が茶色っぽくなるが、この鳥は幼鳥のため灰色の部分が目立つ（2016年4月22日）



春に咲いた花が実となった、夏のハナイカダ（2018年7月8日）

森を渡るイカダ

7月8日、私は本学のうら山を歩いた。ふだんは通り過ぎるだけの道。森の音を聞いて風を感じることで、初めてそこにある植物たちに目を向けることができた。そのとき、とくに目を引いたのがハナイカダだ。

ハナイカダという名前は以前から知っていた、私はその名前からサクラの下をイカダが渡るような光景を想像していた。しかし、じつさいのハナイカダはブルーベリーに似た実が葉のうえに浮かぶように生えていて、その独特なすがたが強く印象に残った。そのためだろうか。教えてもらったとき、以前からもっていたイメージとのちがいに驚いた。

葉のサイズは5センチほどから、大きいと15センチ近くある。実をつぶすと、まさにブルーベリーのように鮮やかな紫色の汁がでてきた。水に色をつけて遊んでいた私が10年前にハナイカダと出会っていたら喜んだにちがいない。見た目が面白いだけでなく子ども心をくすぐるハナイカダ。もっと早く出会いたかった。

こんな出会いがあるなら、近くにあるものに目を向けて森を歩きたい。ハナイカダは私に外へ出る楽しさを運んでくれた。

豊増華歩（国文学科1年）〓文・写真

改札を抜けた先に

「まもなくかせい、かせいです」。6月3日のお昼ごろに富士急行線の電車内で聞こえたアナウンス。初めて聞く「かせい」という地名はどんな漢字で書くのか思いつかなかった。路線図で確認すると、「かせい」とは「禾生」と書くらしい。禾生の名前の由来について調べてみると、この地域一帯が稲（禾）の産地だったことが元になっているという。

改札を抜けると、丸みをおびた「禾生駅」の看板が見える。ところどころ色が変わったうす茶色の壁が、長年駅が建っていることを物語っていた。駅員さんにお話をうかがうと、昭和4年に駅舎が建てられ、その後何回か改築されて今の駅舎になったという。

「いつてらっしゃい」、「おかえりなさい」。あたたかい声が改札に響く。駅を利用する学生に駅員さんが笑顔で優しい声をかけていた。学生はぽつと笑って挨拶を返す。うつむいた顔にほんの一瞬、光が差したように見えた。

初めて駅を使う人、通勤や通学で毎日のように駅を使う人。分け隔てない駅員さんの笑顔に、きつと元気をもらう人は多いのだろう。風情を感じる駅と駅員さんの優しさがとけ合う素敵な場所をこの夏に見つけた。

小林史佳（地域社会学科1年）Ⅱ文・写真



禾生駅の外観。丸みを帯びた文字の看板に自然と目がい
く（2018年6月3日）



国道139号線の曲がり角（2018年7月19日）

ひとつの曲がり角から

都留に来てはじめて通った道は国道139号線だった。両側から建物が迫る都留市中央の街並みを、車を運転する父は「宿場町みたいだな」という。けれど私には圧迫感しか感じられなかった。

別の機会に国道139号線を歩いたとき、忘れてかけていた父の言葉を思い出した。本当に「宿場町」だったのか疑問に思い都留の歴史を調べてみた。史料によると都留市はかつて城下町であり、富士講（※）の人々が宿泊に利用していたという。また、城下町の絵図に描かれた直角に曲がる道は、都留市中央を通る国道139号線の曲がり角と一致する。富士講の人々が行き交った道は、今は車が行き交う国道になっているのだ。曲がり角をきつかけとして街の歴史を知ることになろうとは思わなかった。

7月19日、再び曲がり角を歩く。富士講の人たちの存在を知って、過去の景観を思い浮かべることができた。曲がり角の歴史を知ったことで、はじめて通ったときの落ち着かなさとは違い、今はこの景色を素直に受け入れられる気がする。

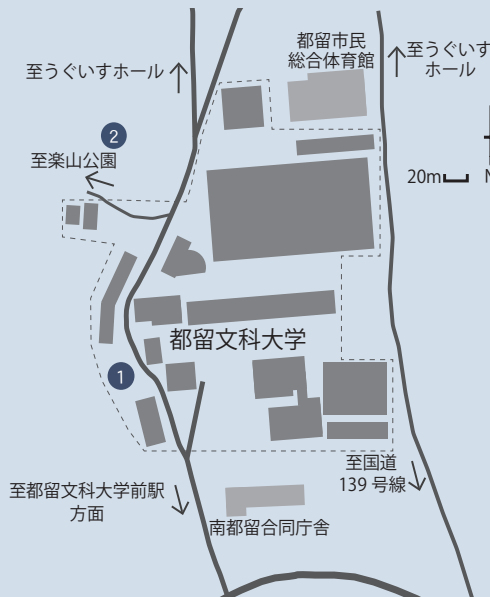
大坂谷和樹（比較文化学科1年）Ⅱ文・写真

センサーカメラが 写した動物たち

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

今年の梅雨は例年よりもずいぶん早く明けました。都留市では蒸し暑い日が続いています。このような天候のなかで動物たちはどのように過ごしているのでしょうか。今回は5月下旬から7月にかけて、自然科学棟裏の水路とムササビの森で、動物たちの生活をのぞいてみました。

センサーカメラマップ



※番号はセンサーカメラを仕掛けた場所を示す

撮影に使ったカメラ



本学フィールド・ミュージアムでは、キャンパス周辺の森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動でシャッターが切れるカメラ）を設置して、動物のすがたを記録しています。写真はセンサーカメラを仕掛けているようすです。

センサーカメラを仕掛けた場所のようす

① 自然科学棟裏の水路



② ムササビの森



1 自然科学棟裏の水路



ネコ

夜中に歩くネコを捉えることができました。前号、ムササビの森にて撮影されたネコと同個体だと考えられます。何かを追っていたのでしょうか。



キジバト

市街地の公園などでも見かける鳥ですが、山中でも観察することができました。1羽で悠々と行動しているようです。体長は30センチ以上あります。



ニホンアナグマ

体長60センチほどのニホンアナグマが水路の上を通りすぎるのを撮影できました。おもにミミズなどを食物にします。



ホンドタヌキ

水路の向こうに渡ろうとしているホンドタヌキを捉えました。体長は50センチほどあり、雑食性でおもに木の実や果実、昆虫などを食物とします。

2 ムササビの森



ニホンアナグマ

斜面を登るアナグマを撮ることができました(写真の白丸部分)。人間と同じく5本指で、斜面を登り下りするのも得意なようです。



ホンドタヌキ

後ろすがたしか捉えられませんでした(白矢印の先)、毛色からホンドタヌキのようです。行動範囲が広く、山林から市街地にかけて見られます。

FIELD NOTE

no. 98 Aug.

発行人

北垣憲仁 (52)

統括編集者

西教生

編集長

山内利奈 (8-9,28-29)

副編集長

小泉篤広 (12-13,26-27,48-49)

平岡摩梨菜 (1,10-11,18-19,23-25,52)

宇佐美温加 (6-7,14-15,30-31,41)

編集

塚原瑞穂 (32-33)

中里真琴 (16-17,50)

小俣溪和 (12-13)

江利そらむ (8-9,34-35,42-43)

佐藤琢磨 (14-15,20-22,42-43)

杉浦茜 (2-3,10-11,38-40)

高橋光 (16-17,36-37,50-51)

大坂谷和樹 (4-5,44-47)

長田じゅりあ (44-47)

柿瑞穂 (44-47)

風間悠花 (44-47,50)

小林史佳 (44-47,50)

豊増華歩 (44-47)

中島華奈美 (44-47)

寄稿

伊藤瑠依 (41)

高橋未瑠来 (41)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no. 98

発行日：2018年8月27日

発行部数：700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

夏、耳をすますと聞こえてくる音

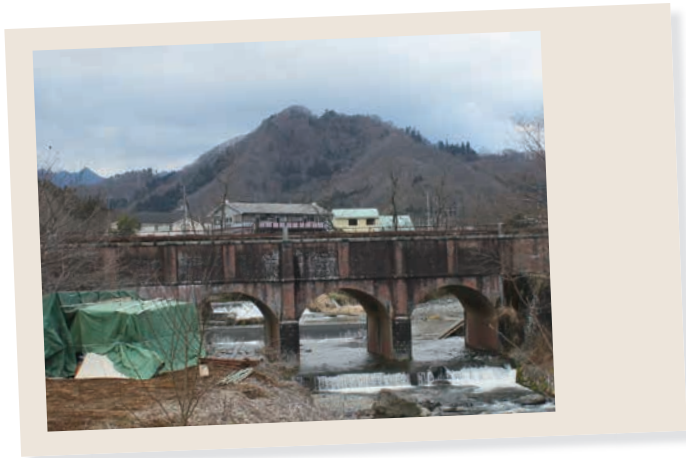
はるか遠くから「ゴロゴロ」と近づいてくる雷鳴。幼いころ、雷の光と音が最大の苦手でした。どんなに暑くても、家の窓をすべて閉め切り、布団に身をくるめて机の下に隠れていました。汗でビショビショになりながら、音が鳴りやむのをひたすら待ち、「やっとどこかへ行ったら」とわかるとカチコチに固まっていた体が一瞬にしてほぐれていきます。安心すると同時に、まるで悪者を退治したかのような妙な達成感。今では暑さに耐えられず、部屋の窓を開けるほうを優先します。一瞬にして暑さを吹き飛ばしてくれる夕立をありがたく思うのです。（風間悠花）

なにか音がする。午前2時ごろパチリと目が覚めました。そっと枕元をみたら私の天敵がいたのです。「ブーン」と音をたてながらも、気づかぬうちに忍び込んでくる。そう、彼らの名は蚊です。何とか安眠を取り戻そうと格闘すること数分。彼らに挑むもすぐに体力が尽き、気がついたら布団に倒れこんでいました。すると翌朝、ふくらはぎに違和感が。触ってみるとぷつくりとした赤い箇所が4か所も。しばらくむずがゆい日々が続き、都留の夏は甘くないなあと身をもって体験した初夏の一コマでした。（小林史佳）

びびびときました。この音はもしかしてと走り出したのは、10年前の夏の夕暮れ。中学校からの帰り道、地面に響く「ジー」という音を聞いた私は家まで走り、母の園芸用シャベルと懐中電灯を手に音がする場所へ戻りました。泥の溜まった側溝をそっと掘っていくと、音の正体が現れました。オケラです。初めての出会いに大興奮したのを覚えています。音を手掛かりにオケラを掘り出したなんて、ちょっとした自慢話。でも、夕暮れに一人側溝を掘る姿は、今思うととても怪しかったのではないのでしょうか。（中里真琴）

次回予告

はし 橋(仮)



2018 年 12 月発行予定

減ってしまった「スジガエル」



左：トノサマガエル(2018年6月26日) 右：都留市上谷地区の水田(2018年7月17日)

初夏の夜、都留市内の水田では何種類かのカエルの鳴き声が聞こえます。

もっとも多く聞こえる鳴き声の主はアマガエルです。つぎはシュレーゲルアオガエル。そして一部の場所では、グルルグルルッとトノサマガエルが鳴いています。かつて地元のかたはトノサマガエルのことを「スジガエル」と呼んでいました。

トノサマガエルは全国的に個体数が減っており、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧種とされています。水田が多く残る都留市の十日市場地区でも、トノサマガエルの声が聞かれなくなりました。その原因はよくわかりません。

2014年6月、都留市上谷地区の水田で偶然、その声を確認しました。そこで本学フィールド・ミュージアム部門では、2015年から同地区を中心にトノサマガエルの生息調査を始め、3～4か所の水田で鳴き声を記録しました。

都留市からトノサマガエルの鳴き声が消えてしまわないようにするにはどうしたらいいのか。これからも鳴き声に耳を傾け、注意深く観察を続けていきます。

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。